
諸事情により

鳩梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諸事情により

【Nコード】

N3823B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

私立巖島高校に通う湊と昴は中学からの友人。万年無表情の湊と、女の子みみたいな昴。そんな二人のお話。ややBL風味ですが、本作は男性にも受け入れられるものを目指しております。

一話

世界を運営しているのが神様だとするなら、きっと神様は茶目っ気たっぷりなじいさんか、いい加減ボケたじじいかのどっちかだと思っ。

別に、この世界に不満があるわけじゃない。

それでも、俺はほとんど本気でそう思っている。

前者なら少々茶目っ気が過ぎるぞと恐れ多くも進言したいし、後者なら誰か他の奴が変われと思う。

まあ、何がいたかと言うとだ。間違っている！ と声を大にして叫びたかったりするわけだ。

誰でも一度はあるだろう。とにかく叫びたい時が。あるいは事が無いと言っているのであればそれは虚偽と勝手に断定するのであしからず——いや。訂正。マッハで訂正。つまらない奴と言う位置付けで行こうと思う。

「ねえ、おいしい？」

「あ？ ああ」

どこことなく不安なそうな声で問われ、俺はくだらない思考を中断して母音のみで答える。

平日。場所は私立巖島高校、屋上。時間は昼。

俺たちは今、本当は進入禁止の屋上で朝食を取っている。屋上には俺たち以外には誰もいない。当然だ。進入禁止なのだし、それを無視してこんな所にいるのがばれたらそこそこ重い処罰が下る。

そんなことは俺たちもよくわかってる。だが、それでもここで朝食を取っている。しかも毎日。大した理由は無い。強いて言うなら、教室よりかこの方が断然良いと言うだけだ。

俺の名前は円谷^{ついでにや}湊^{みなと}。この高校の一年で、部活には無所属。そして、

「そっか。よかった。湊は顔に出ないから、たまに不安になっちゃ

う」

そういつて、俺の横でぺたんと女の子座りをして淡く微笑んだのは、俺の友人。有栖川 昂^{ありすがわ すはる}。俺と同じ高校一年で、演劇部所属。料理や裁縫が趣味で、その腕はかなりのものだと思う。俺がそう言った家庭的なものと悉く仲が悪いから、少しでも出来てしまうことをそう思うだけかもしれないが。

「何度も言うが、お前の料理は美味だよ。不安になる必要は無いさ」
黄金色をした少し甘めの卵焼きを口に入れながら正直に言うてる。俺の昼食はいつもコイツのお手製。特に頼んだわけでもなく、自発的に作ってくれてる。味もいいし金もかからなくて済む。ホント助かってる。

「無表情でそう言われてもあまり実感湧かないけど、ありがとう」
にこり、と笑む昂。

俺は何気ない風を装いながら雲一つ無い蒼穹を見上げる。痛いくらい輝きを放つ太陽が目染みる。

……直視できない。

屋上は味気ないコンクリートの床に安全性皆無な錆びた鉄柵があるだけの、がらんとした場所だ。けれど、わるい場所じゃない。何もないというこの広々とした感じが、とても落ち着く。

「あ。また人参だけ器用に残してる。湊、いい加減子供みたいな好き嫌いを直しなよ」

「むう……」

弁当箱の隅のほうに退かしていた人参に昂が目ざとく気付いて口を尖らせる。

確かに子供みたいな好き嫌いだと俺自身でも思うが、嫌いなものは嫌いなだから仕方がない。何が嫌いって、味が嫌い。どうしても人参の味だけは好きになれない。きつと相性が悪いのだ。マイナスの磁石同士なのだろう。絶対にくっつかない。

さて。この学校は男子校だ。つまり野郎ばかり。俺は共学に進学したかったのだが、ちょっとした手違い……というか失敗と言う

か……とにかく事情で、切羽詰った事態に追い込まれた俺は、残った選択肢の中で一番良い学校であるここを選ぶしかなかったのだ。他の選択肢は、共学でも偏差値が低いので選ばなかった。

だから、男子校に通う俺も、妙に家庭的なスキルを持つ昴も男だ。まあ、俺はともかく昴を見た奴は十中八九昴を女だと思うだろう。スキルだけの話ではない。腰まであるシルクのような流れる長い髪も、やや丸みを帯びた顔立ちも、長いまつげや大きな瞳や、ふっくらとした淡い桜色の唇も、ガラス細工のように繊細な指も、細い四肢も、昴はどこをとっても男らしくない。むしろ女みたいだ。地べたに座るのにハンカチを敷く男なんてまずいないだろう。おまけに声でさえやや高いと言う徹底振りだ。

そして、本当に。いつも疑問に思い未だ解消されること無いことなのだが、何故だか女子用のサマーセーターとスカートを着ていたりするところも、もう本気でどこまでも男じゃない。

てか、なんで男子校に女子の制服があるんだ。ここは創立以来ずっと男子校であるというのに。昴にそのことを尋ねても、可愛らしく小首を傾げられるだけなのでこの疑問は消えない。他の誰に訊いたところで答えは「さあ？」としか返ってこないし。

ちなみに、今は七月。当然制服は夏服で俺も昴も半袖なのだが……。夏服というものは薄い。昴はサマーセーターを着ているが薄いことに変わりはない。当然、男である昴は幾ら女の子みたくても制服を突き上げて自己主張するような胸は無い。だが、半袖から見える腕は肌理の細かい薄い象牙色で、綺麗なわけだ。スカートから伸びる脚はオーバーニーソックスに包まれているが、スカートとソックスの間からちらちらと見える肌もやっぱり綺麗だ。

つまり、アレだ。目に毒。

——とかそう言う思いを抱く俺はかなり危ない奴じゃないだろう。落ち着け俺。昴は男だぞ。

はあ。空が青い……。

「ごちそうさま」

「おそまつさまでした。……もう。結局人参残して」

「人参は薬なんだぞ。薬の無意味な摂取は健康を損なうただけだ」

「それは蓬莱人参とかでしょう。それに、漢方だし。せつかく湊でも食べられるようにがんばったのに……人参は栄養があるから無意味じゃないのに」

弁当箱の包みを閉じながら溜め息をついて肩を落とす昴。しょんぼり、という効果音が聞こえるかのような見事の気の落ち込み方だ。てか、反則だ。そんな風にされると何故だか悪いことをしたような気になってしまう。

「だったらもう少し味付けを辛くしてくれ。そうすればあるいはもしかしたら多分きつといずれありえないとは思うが、食べられるかもしれない」

「ただ辛いのが食べたいだけでしょ？ ダメだよ。塩分は控えないと」

「大丈夫だって。その分だけ糖分を摂取すればプラスマイナスゼロだ」

「湊。その足し算は間違ってるよ」

「ウソ!？」

「はぁ。湊って、頭良いのか悪いのかわかんない」

嬉々として発せられた俺の最高の妙案に、昴は呆れたように溜め息をついた。

ちよつとシヨックだ。

二話

美味しいご飯で腹の膨れた俺は、午後最初の授業を居眠りして過ごした。これは満腹でいい感じに眠気も誘うだろう昼食後に、英語などと言うものをやる学校側に責任があるのであって、俺は決して悪くない。

だから、現在俺が置かれている状況は不当なものなのだ。

「つぶあん。お前っていい度胸してるよな」

笑いながらそう言っただけで声をかけてくるのは、この学校に入ってから出来た友人。鈴木 鐘太だ。名前同様、無駄にうるさい奴だ。

「入学してそろそろ3ヶ月。いい加減どの先公がどういった奴か把握しておくべきだろ。てか把握してるだろ」

相手をするが増長するので、俺はさっきからずっと無視しているのだが……いつこうに黙る気配が無い。アレなのか？ 鈴にしる鐘にしる一度鳴り出すと暫くうるさいと言う法則はその名を冠したコイツにも当てはまるのか？

「多分お前だけだぜ？ あろうことか英語の授業で居眠る奴は」

「だーっ！ もうっっさいわ！ こっちは必死なんだよ邪魔すんな！」

いい加減我慢の限界になり、俺は思わずがーっとなげける。

俺は今、居眠り三冠達成を果たした罰として、特別課題と銘打たれた翻訳作業を死に物狂いで行っている。

そう。翻訳。英語で書かれた薄い文庫タイプの詩集を35ページ翻訳して提出しろと言われたのだ。これを無事五時までに仕上げれば、今回の三冠は目を瞑ってくれるという。ただし、出来なければ来学期。他の三冠達成者が出るまでパシラされる。なにをさせられるのかさせるつもりなのかは知らんが、それだけは絶対に嫌だ。

だからこうしてがんばっているというのに、コイツはニヤニヤと嫌い嫌い。なんなんだよ。嫌がらせか？

「怒るなよつぶあん。てか、怒る時くらい表情筋を活用しようや。無表情で怒るっつーのはちよいと間抜けだぜ？」

「つぶあん言うな。……言うほど無表情だったか？」

「あ？ 気にしてんの。無っつーほどでもないがな。なんか微妙だった」

そうか、と呟いて俺は英語の詩集との格闘を再開する。

くそう。言い回しが独特だったりして普通の訳しかたがいまいち当てはまらない。てか、絶対これ習ってないって。無茶だつてクソッたれ！

今は放課後で、教室には俺と鐘太しかいない。昴も同じクラスだが、あいつは部活に行ってる。手伝おうかと言ってくれたが、流石にこれは俺の自業自得だ。謹んで断わった。付き合わせるのは悪い。鐘太がここに居るわけは知らん。こいつは俺と同じで部活にははいっていない。そんな暇があるなら子猫ちゃんにやんにやんしたというのがこいつの弁だ。だと言うのに、なぜかコイツはこうして邪魔をしやがる。一発殴りたいが、それをしている時間が惜しい。この学校は男女交際などに厳しくは無い。だがそれは認めていると言うわけではなく、各々の判断で責任と自覚を持って行動しろ。と言うこの学校の理念に基づくもので、何か問題を起せば即座に重い処分を受けることになる。過去に何人かまとめて退学処分にされたこともあるという噂を耳にしたことがある。

それでもこいつは普通に股かけしている。二桁に届くか届かないかの数らしい。

確かに、こいつは女受けしそうな容姿だし性格も悪くない。それでも、度が過ぎればいずれ刺されるだろう。それはそれで愉快だし、俺の知ったことではないが。

「はい。残り10分。がんばれつぶあん負けるなつぶあん」

「うっさい黙れ気が散る！」

残り10分。対して現在のページ数は32。あと3ページ残っている。無理かもしれないと思わせる時間とページ数だが、こうなり

ややけだ。単語と文法から適当に訳していくしかない。多分、ギリギリで間に合う。間に合え！

「チッチッチチ……」

時を刻む音を口ずさむ騒音装置を音で殴ることを胸に固く誓った。

三話

ギリギリで翻訳作業を終えた俺は、鐘太に顎を掠めるようなアップーカットを真心込めて贈り、眠りにつかせた後、鞆を手に教職室へ特別課題を提出しに行った。

ギリギリ無理な課題を出して生徒を苦悶にのたうちまわすのが大好きな英語教師は、俺が時間内に終了したことになるやらとても不満気な顔をしていた。

余計なことを言われないうちに、とさつさと教職室を退室した俺はその足で演劇部部室へと向かった。

演劇部部室は見た目安普請なアパートの部室棟にある。運動部のように特定の部室を必要としない部は、ここに入っている。

演劇部は体育館なども使って練習するが、バスケットがほとんど毎日使用しているため、必然的に部室内での練習となる。

演劇部部室についての俺は、扉をノックして開けてもらう。

最初に言ったように俺は部活は無所属だ。だから、こんな所にわざわざ来る必要は無いのだが、一応帰ることを鼻に言っておかなければ、あいつははぶてるし無駄に心配とかする。その結果として、俺は何度か弁当に人参のオンパレードと言う責め苦を味合わされたことがある。アレは俺の中では軽くトラウマだ。本気で二度とごめんなのだ。あんなことは。ああ、思い出しただけで鳥肌が立つ。

「はっはっ。いい。どちらさま〜ん？」

妙にしなのある低い声が扉越しに聞こえた。正直に言おう。気持ち悪い。キモイとかじゃなくて気持ち悪い。

「あららん。み〜ちゃんじゃない。どうしたの？ はっ！？ ついに私のプロポーズ——をぶっ」

あっ。

やっべ。気持ち悪い人が気持ち悪いこと言いながら出てきたから、

思わず脊髄反射で力いっぱい叩き閉めちゃったよ。ちなみに、扉は外開きだったので叩き閉めるのに都合が良かった。

扉の向こうから『大丈夫ですか部長？』『死にましたか部長』『部長が死んだしキリがいいからこれで今日はもう解散にすっか』等々。実に部長の扱いになれた素適に感情のこもらない会話が聞こえてきた。部員達もあの力マ部長のことはどうでも良いらしい。まあ、普通の神経ならそうだろう。

俺はゆっくりと扉を開けた。誰も開けてくれないからセルフサービスだ。

「あ、湊。どうだった？ 時間どおりに終わらせれた？」

扉を開けた俺に昴は喜色満面。そう訊いて来た。部室内の他の部員も俺が来たことを知るとそれぞれに挨拶をかけてくる。演劇部の奴らは昴を通してだが知りあいだ。とりあえず、顔と名前は一致する。ほとんどの演劇部員は上級生なのだが、演劇部員たちはそういうのを一切気にしない気さくな人達だ。

「見たらわかるだろ。無事に終わらせたよ」

昴は俺の言葉に、「よかった」とまるで自分の事のように嬉しそうにへにや、と笑った。

「……ところで、その格好は何だ？」

「え？ これ？」

あえて気にしないでおうと、精一杯の理性や日和見精神や崖っぷちの根性とかそう言うアレでがんばっていたのだが、ダメだった。

「え、えへへ。その……似合う、かな？」

テレテレと頬を朱に染めながらそんなことを訊いてくる今のこいつのその格好は、確かに似合っていた。似合っていないはずが無かった。思わずクラリときたくらいだ。これを見て似合っていないなどとのたまう奴は、よほど見る目が無いかスペシャル級のゲテモノ愛好家のどちらかだろう。本当ならばもう少し捻りのあることを言いたい、いかんせん俺は貧乏だからそう上手く出てこない。ああ、語彙がな。

昴の今の格好は男子校なのになぜか存在する女子制服姿ではなく、淡い薄黄色の簡素なドレス姿だった。襟元や袖口、スカートのところにフリルが控えめにあしらわれていて、どこか深窓のお嬢様みたいな感じになっている。衣装の所為か、いつもよりも女度が3から4割程増している気がする。

「そ、そのね。えっと、今度の舞台……ていうか初めてのなんだけどね。その、ボ、ボクがヒロイン役になって……その、あのその衣装なんだけど」

耳まで真っ赤にして恥ずかしそうに俯きながら、消え入りそうな声でそう言う。はつきり言ってる。笑わば笑え。そして軽蔑したければ勝手にしろ。

——クソかわいい。

「どうどうどう？ もう、めっちゃプリチーじゃない？」

一生そのまま死んでくれていたら世界は最低でも二割は平和になるはずなのに、気持ち悪い奴はここぞとばかりに復活して得意げに、まるで自分の手柄のように胸を張る。

この気持ち悪いカマ口調の気持ち悪い奴は、演劇部の部長で三年の川原 藤土。マスカラやらなんやらをものすごく活用して女装メイクを常に行っている真性のオマカ。何度でも言おう。これでもかと言っくらいに気持ち悪い。

どうでもいいが、この学校は染髪脱色はOKでアクセサリーは禁止。さすがに化粧をしてくる奴が出てくるなどは学校側も思っていないかったらしく、校則には化粧については一切触れられていない。今のところは、こんな完璧力メイクをするような輩はこの気持ち悪い奴しか居ないので、学校側は放置してる。

まあ、俺としては学校側に言いたいこと——ツツコミたいことは山とあるのだが、気にしたら負けな気がする。何につて、この状況に。他の奴らは軽くスルーしてる。多分慣れたんだろう。慣れって怖い。

昴はまだ恥ずかしそうに俯いていて、時折、俺の顔を伺うように

上目使いで見上げてきてはすぐに俯くということを繰り返している。さつきから黙りっぱなしだから気になるのかもしれないが、こいつは気付いてるのだろうか。今の自分が客観的にどう見られているか。ちなみに、他の部員たちは各々勝手に帰った奴もいれば、部室に残って駄弁ってる奴も居る。徹底してこの異常を無視するその手腕は流石としかいいようが無い。身近に異常が常にあると、ほとんど呼吸と大差ないのだろう。そんな日常はとても嫌だが。

「……や、やっぱり、似合わない……よね」

いつまでも反応しない俺に、昴はしゅん……となってそう呟いた。「ああ、いや。そんなことはないぞと思う。うん。どっから見ても女にしか見え」

俺は若干焦った頭で途中まで口走ってから、しまったと自分の愚行に気付き言葉を切る。

「すまん」

わかりすぎるくらいにわかりきっていることなのに言ってしまった。そのばつの悪さから短く謝罪するが、

「え、あ……。いいよ。気にしないから。これは、そういう衣装だもの」

昴は笑いながらなんでもないことのように軽い調子でそう言う。

だが、俺は見逃さなかった。俺が口走った瞬間。僅かにだが、こいつは息を飲み硬直した。

四話

昴は女の格好をしてはいるが、何も好き好んでそんな格好をしているわけじゃない。確かに、こいつ自身男とは思えないくらいに、むしろそこの女子よりかわいいが、だからと言ってこいつが男である事実は変わらないし、女装の趣味は無い。まあ、かわいいものを嗜好してはいるが。

昴が女の格好をしているのには訳がある。昔から女みたいだった昴はよく男子女子問わずに苛められていた。どこるか家の中でさえ、いまだに男尊女卑を謳う父親に暴力をふるわれていた。

苛めはエスカレートし、中学になって俺が転入してきた時点の段階で、それは苛めなんて言うかわいものから、迫害という名のリンチに変わっていた。それでも、学校へ行かなければ父親に暴力をふるわれ、学校側は日和見となかれ主義を貫いて、苛められる昴に原因があるとして無視していた。

俺が有栖川 昴を知った時には、もう昴は完全に心を病んで壊れていた。ただされるがままになって、文句の一つも泣き言も悲鳴ですら上げない。ただの人形と成っていた。

それでも、小っ恥ずかしい正義を振り回していた俺の些細なおせっかいで、昴は笑えるまでに回復したのだが、一度病んで壊れてしまった心は完全には戻らず、『男の格好をしているとまた苛められる』という恐怖から、たとえばほんのちよつとでも男のような格好をすることが出来なくなってしまった。実際男の格好をしていたらまた苛められるかどうかはこの際関係無い。問題なのは昴の心と精神で、以来昴は男の格好をすると見ているほうが辛くなるくらい痛々しく病むようになってしまった。

だから、どれだけ昴に似合っतीयうとも、それは昴の望んでのことじゃないのでそう言ったことを言うのは禁句なのだが……。馬鹿たれだな。俺は。

「んもつ。なに暗くなっちゃってるの。みーちゃん。昴ちゃんがこんなにもかわいく変身したんだからもう少し感想を言いなさいよ」
だっていうのにこのクサレカマ野郎は場の空気も読まずに、んな事をほざき始めやがった。

けど、まあ。そのお陰で場の暗い空気はなぜか霧消した。見れば、昴はまた恥ずかしそうにしてるし。

癪だが、感謝してやるべきかね。が、まあ、とりあえず。

「俺の呼び方を改めるカマ原。てか俺の名を口にするな」

俺はこの三ヶ月で一体何度口に舌かわからない台詞を吐いておくみーちゃんとか、今まで呼ばれたことも無いわ。

「ひどつ。表情がほとんど無だから余計に冷たいわあん。け・ど。

そこが痺れるーん」

ぞわり、と背筋が冷えた。思わず俺の右が螺旋を描きながらのストレートを放つ。

「つぶ！」

俺の拳が気持ち悪いカマ原——オカマ川原の略。一般常識的呼称——顔面に見事にヒットする。

「……ふ、ふふ。これが、みーちゃんのおて手の感触」

倒れた気持ち悪い奴からそんな気持ち悪い眩きが聞こえた。全身が一気に総毛立つ。特番に組まれたもつともらしい心靈番組なんかよりもよほどリアルな怖さがそこにあった。次元が違う。

「や、やーそれにしもアレだな。劇の衣装にしちゃんなんか普通だな」
俺は無理矢理強引に軌道を修正し、昴にそう声をかけてみる。

やたら芝居がかった地に伏し方をするカマ原——既にお気づきかと思うが先輩だとかの認識は俺には一切無い——を心配そうに眺めていた昴は、俺の言葉に反応して向き直った。

「うん。ないようはまだ秘密なんだけど、劇そのものは派手さを控えたモノをやるから、それに合わせると自然とこういう衣装になるんだよ。けど、これでもまだ少し派手過ぎるって意見もあって」

いや。多分それは衣装が、じゃなくて。衣装を着たお前が、だと

俺は思うぞ。

そう思うが口にはしない。同じ鉄を踏むような馬鹿はしない。

「ふうん。なんにしろ、楽しみではあるな」

「無表情で言われても微妙だけど、本当？」

「ああ。なんだって友達の初舞台だ。楽しみにもなるさ」

「——うれしい」

昴は頬を朱に染めてもじもじした。

ちよいと昴さんや。そう言った反応をそう言った反則状態でされ
ると、こつちまでやたらと恥ずかしくなってくるので勘弁してくだ
さい。いやもうマジで。

「あ、ええっと。ボク、着替えてくるね。いいですよ？ 部長」

「いいわよーん。なんか皆勝手に解散しちゃってるし。今日はもう
お開き」

パンパンと埃をはたきながら立ち上がると、カマ原は昴と一緒に

「っておいコラ。なんで昴と一緒に奥に引っ込もうとしてるんだ？」

俺は怨嗟の声を放ち、昴と一緒に部室奥のカーテンに仕切られた
場所に引っ込もうとしているクソカマを止める。

「やーん。止めないでよお。一度でいいから昴ちゃんのお着替えを
見たいのよん」

「そうかそうか。——昴。お前はさっさと着替えて来い。オイコラ
腐れカマ野郎。ちょっと口をあけてみ？」

不穏な空気を感じ取ったのか、おろおろとしだした昴をさっさと
着替えてくるよう言ってから、俺は言われた通りに口を開いている
カマ原の顎を殴りつけた。

ガチン！ とか言う硬い小気味いい音がした。

「うわ。今のは痛い」「さすがだ円谷」「けどまだ生きてるぞ」「
ホントだ」「なんか顔を抑えてはたばたしてるのが気持ち悪いな」
「いつも気持ち悪いけどな」「そろそろ帰るか」

俺の悪徳アッパーを喰らって打ち上げられた魚のような愉快に気

持ち悪い状態になっているカマ原を見て、残っていた部員達は好き勝手に言うだけ言っていると帰っていった。

見事なまでに素適な奴らだ。

「ごめん。この衣装、脱ぐのがちょっと難しくて」

暫くすると昴は制服に着替えて出てきた。その手には丁寧に畳まれた、先ほどまで着ていた衣装。

「いや、いいさ。ところで、それってハンガーとかに架けとかなくて良いのか？」

確かああいうドレスとか見たいな服は畳むとしわになるから、ハンガーに架けとかないとまずいんじゃないかなって思った。

「うん、普通はそうなんだけど。倉崎先輩が畳んどけて」

倉崎と言うのは演劇部の衣装やら機材やらの製作修復を担当している手先の器用な二年生で、俺は数回しか顔を合わせたことが無い。見た目がどこかの社長みたいで、絵に書いたような「できる人」だ。

「ふうん。んじゃ帰るか」

びったんびったんのた打ち回っているカマ原を見てびくついてる昴にそう言っていると、俺は部室を出た。

「あ、うん」

遅れて昴も部室を出た。カマ原のことは完全無視。ゴキブリも気持ち悪いオカマもそう簡単に死なないから、無視しておいて問題ない。てか、ちょっとでも構うと付け上がるからな。鬱陶しいくらいに。存在そのものがうるさい奴って始めて見たよ。

五話

「ねえねえ湊」

くいくい、とズボンから出して崩して着ている俺のカッターが引つ張られる。何でか知らないが、こいつは袖だったり裾だったりを引つ張る癖がある。大した力で引つ張られているわけではないので、伸びたりする心配は無いが、正直どうよ？　と思わなくも無い。

「あ？　なに」

「えつとね。ボク、寄りたい所があるんだけど」

「ん」……この時間だと寮の門限に間に合わなくならないか？」

腕に巻いてる安物の時計を見ると、時刻は17時35分。……以外に時間を食ってたらしい。

俺と昴は実家じゃなく学生寮に住んでいる。全寮制ではないが寮を利用する生徒は結構いる。親元から離れたいとか、家が遠いとか、まあそれぞれに理由があるのだろうさ。

寮の門限は夏は19時半までだが、それは遅くまで練習がある運動部に限られる。文化部や部活無所属者は、18時15分までに帰らなければ面倒なことになる。本当は18時までのだが、15分から20分の間に寮監の点検があるため、その前に戻っておけばとりあえず安心だ。

だが、寮は学校から徒歩で10分くらいの所にあり、何か買い物をするなら寮とは逆方向に行かなければならない。この時間だと、行つてすぐ帰つてくることになる。とても買い物なんかしてる暇は無いだろう。

「うう……。けど、どうしても欲しい物があるんだよう」

「明日じゃダメなのか？」

「うん」

「何がいるんだ？　それって、代用利かねえの？」

情けない声を出す昴にそう訊くと、なぜだかそこで会話が止まる。

ついでに昴は足も止めてる。なんだ？

怪訝に思いながら俺も立ち止まる。

昴は俯いて何事か考えているようだった。

「どうした？」

「ああ、あのね。ボクの使ってた石鹸が切らしちゃって」

もじもじと消え入るような声で恥ずかしそうにそう言った。

「は？ んなもん、俺の使えばいいだろ」

何をそんなに考え何故にそこまで恥ずかしそうにしているのかが、全くもって理解できない。

「う……。あ、あのさ。湊の使ってるのは石鹸だよな？」

「はあ？ 当たり前だろ。食器用洗剤でも使ってると思ったのか？」

「違うよ。えっと、固形物だよな？」

「固形物って……。ああ。そうだけど」

こいつが訊きたかったのはボディソープか固形石鹸かってことらしい。何でそんなこと訊くんだ。本気でどうでもいいことだと思うのだが。

「そっか……」

「？ ボディソープよりも固形石鹸の方がお得なのはお前も知ってるだろ」

質さえ無視すればボディソープを買うだけの値段で、固形石鹸三個一パックのやつが確か三パック買える。他の所では知らんが、繁華街にある量販店ではそうだった。だから、貧乏学生である俺はボディソープなんて贅沢な物は買わない使わない。それは、昴も知っているはずなんだが。

「うん。あのさ、未使用のが残ってた」

「いや。今使ってるのが最後」

「……………」

なんなんだ？

昴は顔を耳まで真っ赤にして黙り込んでしまった。

んん？ 今の会話に顔が赤くなるようなワードがあったか？ 考

えるが、そんなものがあつたとは思えない。第一、俺はそう言うのも気にしながら喋ってるからそうそう出るはずが無い。

うつむ。わからん。

「おい昴。お前、なんか変だぞ」

「うう。いや、だって……」

「ごによごによとやつぱり消え入るような声。

ダメだこりゃ。

と、そこまで思ってから思い出した。そういや昴はいつも決まったボディースーツを使うんだっけか。

俺は質よりも安さを重視しているが、昴は安さよりも質重視派なのかもしれない。

「ああもう。わあったわあった。さっさと行ってさっさと帰ってこようぜ。じゃなきゃ門限に間に合わなくなる」

俺は溜め息と共にそう言うのと、さっさと歩みを再開する。行くにしても行かないにしても、いつまでもこうしてたって意味は無い。時間が無為に過ぎていくだけだ。それに、どうも昴は俺の使ってる石鹸を使うのが嫌そうなので、買いに行くしかないだろう。昴は綺麗好きだし。

「あ、待ってよお」

昴がぱたぱたと小走りになりながら言うが、一々止まってはやれない。最悪、帰りは全力疾走だな。大丈夫か？ 昴って足遅いからなあ。

「うう。湊の……それって、うう……」

後ろで何かぶつぶつと呟いているが、ほとんど聞き取れないし独り言だろうから無視しておく。

六話

結局、俺の危惧した通り、帰りはスタートダッシュからアクセルベタ踏みの全力疾走をするはめになった。まあ、そのお陰で間一髪、門限に間に合ったが。

昂は俺の心配していた通り、小学生の方が早くないか？　と思えるほどの脚の遅さを披露してくれたので、仕方なく俺が手を引いて無理矢理俺に合わせさせた。じゃなかったら俺たちは後10分くらいしないと戻って来れなかっただろう。

その昂は寮についたときには肩どころか全身で荒く息をしている状態で、涙目になっていた。しかも今は7月で暑い。暑さの中での全力疾走のせいで紅潮した顔とか、汗で張り付いたブラウスとか髪とかが、やたら艶っぽかった。

——って、だから俺！　昂は男だっつーのに。

寮の外観は何の面白味も飾り気も無いコンクリート色の四角い建物で、アパートに比べると大きい程度。

俺と昂は一緒に部屋だ。

これは偶然とかではなく、俺が学校側に無理を言っただけでもらった。

二年生からは誰と相部屋になるか事前に申請すれば選べるらしいが、本来一年生はクラス別に完全ランダムらしい。

そのため最初学校側は渋っていたが、頑として譲らず頭を下げつづけた結果特例として認めてくれた。

まあ、それには昂自身のちょっとした事情も関わっている。

俺も詳しく知っているわけではないのだが、昂はいつも異常と言えるほどに他人に脚や腕、顔などの部位以外の素肌を見られることを嫌う。苛められていた時のや父親にDVされていたときの傷跡があるからではないかと俺は思っているが、本人に訊いて確認したわけではない。ただの憶測。わざわざ訊いて傷口に塩を塗りこむよう

なこともしたくは無い。

だが、それ以外に理由が見当たらない。そして、その他人には俺も含まれている。

別にそのことに何かを思うことは無い。同情や哀れみなど、あいつは望んでいないだろうし、俺はそう言った感情が嫌いだ。

現在の時刻は20時過ぎ。

食堂で美味くはないが不味くもない夕飯を終え、俺は二階にある談話室のソファに座って、友人から借りた同人誌を読んでいる。

別に俺にそういう趣味があるわけではなく、単に時間を潰す手段を探していたら半ば無理矢理に借りることになったただけだ。原作のわからないパロディ本を読んでも面白くも何とも無い。

それでも文字を目で追うという行為は嫌いじゃないので、一応暇つぶしにはなっている。

談話室は学校の教室よりやや広いくらいの面積で、会議なんかで使われるようなテーブルと椅子。テレビと幾つかのソファ。後は自販機が置いてある。床はクリーム色の絨毯が敷き詰められている。まめに掃除されているらしく不潔感は全く無い。

昂は今、各部屋に備わっている狭い風呂で入浴中。俺は昂の気持ちを含んで、入浴中は部屋から出ることにしている。泣いて嫌がるほどに裸を見られることを嫌っているのだから、何かの拍子で間違っただけで見てしまったらマズイ。

どうでもいいが、この寮から徒歩で三分の位置に銭湯がある。そこは昔からある由緒正しい銭湯であるらしく、江戸っ子気質な元氣じいちゃんが番台をしているらしい。

なので、部屋にある狭い風呂を使う奴よりも、銭湯に行く奴が断然多い。俺は銭湯みたいにな不定多数が一度に入浴すると言うのが非常に気に喰わない性質なので、狭くとも不便でも、部屋の風呂を使う。

「オイつぶやん」

微妙に関西訛りのある陽気な声が聞こえた。それに反応して顔を

上げれば、派手な唐草模様のシャツのボタンを第3第4ボタン以外全部開けた、赤銅色の髪をした男がふらふらと近づいてきていた。

奴の名は城島 尚治。俺に無理矢理同人誌を押し付けてきた自他共に認める——といか自分から吹聴している開き直ったオタクだ。

「相変わらず早いなジョージ。鴉の行水って言葉知ってるか？」

ジョージと言うのはこいつが周りに強制しているニツクネームで、こう呼ばないと一切反応しない。喻え先輩や教師であつてもそれを貫いてるのだから、異常だ。

「ウチは鴉を越えることが目標なんやでい？」

そう陽気に不思議な関西弁で言う通り、こいつは入浴時間が早いめっさ早い。俺がこいつから同人誌を借りたのが10分前で、こいつはそのときに銭湯に行ったから、四分とか言う正直ありえない入浴時間になる。

「どうでもいいが、お前ちゃんと洗ってんのか？」

幾らなんでも早すぎるため、俺は当然のように疑問をぶつけてみた。

身体洗って頭洗って。絶対四分じゃあすまないはずなのだが。

かく言う俺は入浴時間はだいたい20分程度。たまに一時間とかになるが、それは浴槽の中で寝てしまうことがあるからだ。入浴中の脱力感はいつまでたつても素晴らしいと思う。

「当たり前やん。両手を駆使したウチの妙技は、もはや仙人級なんやでい？」

……両手を駆使ってことは、頭と身体を言葉通りの同時進行で洗っているのか？ 器用な奴。

「ウソやー思うなら今度つぶやんも銭湯使えばええねん、ウチと。あそこ学生は入浴後のコーヒー牛乳が無料なんやし」

呆れている俺に、奴はそんな提案をしてきたが俺は憤んで辞退させてもらった。なにが悲しくて誰が入ったかもわからない混合出し汁風呂に入らなくちゃいけないんだ。そんなもの地獄じゃないか。汚れを流すための入浴が、逆に汚れ塗れになるわ。

「てかさ、何でお前ってそんなに早いのか？」

なんとなく、思ったことを訊いてみる。別に意味は無い。昴の入浴時間は結構長いので、駄弁って時間を潰そうと思っただけ。借りてた同人誌は、やっぱり原作がわからないから面白くない。内容も設定もいまいちわからないし。

「短縮できる時間は短縮して、趣味に生かしたいやん」

なにをわかりきったことを、みたいな感じでジョージはそう言っ
てソファに座り、テレビをつけた。談話室にはいまだにブラウン管
だがそこそこでかいテレビが置いてある。

「趣味にいかすんじゃないかったのか？」

「この時間は別やねん」

そう言っ
てジョージはバラエティ番組に集中しだした。

駄弁って時間を潰すことは断念するしかなさそうだ。

テレビは寮内には談話室にしかなく、各部屋にテレビはない。それでも、自費で買った家から持ってきたりして部屋にテレビを置いてる奴もいるが、いかんせんアンテナケーブルを刺す所が部屋には無いので、どっちにしろテレビは見れない。精々がゲームやビデオ、DVD用のモニターだ。

同人誌をテーブルに放り、テレビに目をやる。ジョージは自分の本がぞんざいな扱いをされたことに気付いていない。

その番組はどっかで見たことあるようなタレントが、お笑い芸人
たちと面白くも無い話をしながらクイズをしていくものだった。

すぐに飽きた。

俺はこういうのの何が面白いのかが理解できない。ひたすらつまらない。ジョージはなぜか真剣に見ているが、好きな芸人でもいるのだろう。こいつがリアルな存在に興味を引かれるとは思えないが。

……暇だ。

こういう時、大抵の奴はケータイでもいじるのかもしれないが、
生憎と俺はケータイなんて文明の利器を持っていない。あつたら便

利だろうとは思うが、無いからと困るわけでもなし、金にかかるしと持たないことにしている。

仕方ないのでいつも通りにMDでも聴いておくことにする。

ポケットから少し型の古いMDウォークマンと、フックタイプのヘッドホンを取り出す。

俺は今時の歌とどうも相性が悪いらしく、聴いていても雑音にしか聞こえない。だから、MDの中の曲は全てクラシックだ。クラシックが特別好きなわけではないのだが、聴いていると時間が早く過ぎて行く気がするのだ。

再生すると、ヘッドホンからモーリス・ラヴェルのボレロが流れてきた。

ボリユームを少し上げ目を瞑った。

七話

気がつく、談話室内の人の気配が増えていた。

閉じていた瞼を開くと、テレビの番組がドラマに変わっており、何人かがそれを見ながら何か話していた。他にもカード麻雀をしている奴らもいた。その鬼気迫るような表情から推測するに、金を賭けているようだ。

……どうやら。目を閉じ聞き入っていたはずが、少し寝ていたらしい。

ソファの背もたれに首を乗せて上を向いていたので、首が固くなつて変に痛い。軽く回してからヘッドホンを耳から外す。

と、

「——ええか？　せやからシャツの開きくらいはこうでやな」

「ええ！？　け、けど……」

「アカンでえ。そんなへっぴり腰やと」

「で、でも……」

陽気だが真剣な不思議関西弁と、よく聞きなれた少し情けない感じの女の子みたいな声が聞こえた。割と近い。てかすぐ横から。

首を左手に向けると、ジョージが何やら真剣な目つきと手振りで鼻に何かをレクチュアしていた。背を向けているため俺の方からは鼻の顔は見えないが、どうやら困っているようだ。

「……なにやってんだ？」

コキコキと首を軽く鳴らしながら声をかける。ああ、この骨の鳴る小気味いい感じ、たまらないね。

「あ、湊。おはよう」

「おう、つぶやん。起きたか。——てかな、アリス。今は夜なんやからおはようはおかしいやろ」

どこかホツとしたような鼻と、一転して陽気な表情のジョージ。アリスというのは鼻の愛称で、俺や鐘太、カマ原以外の奴が大抵、

昴のことをそう呼ぶ。昴って言うよりもアリスの方が断然似合っているから、そう呼びたい気持ちもわからないでもないが、そう呼ばれている昴自身はアリスという愛称をあまり快く思っていないようだ。嬉しくは無いらしい。嫌でもなさそうだが。

昴は風呂から出て間もないらしく、髪はまだどこか湿っていて、身体もまだ火照っているようだ。

「今な、アリスに必殺技を伝授してん。これをマスターした暁には、アリスはもう向かう所敵なし！ 無敵やでい！」

やたら陽気にテンションも高く、親指をぐっと突き出しそう主張するジョージ。なんだろうな。すごい嫌な予感がする。

ジョージ曰く必殺技を伝授させられた昴は、肩を落とし、はあとか言って溜め息をついていた。

……予感は、確信へと昇華された。

どうせこの二次元オタクは、その持てる二次元知識をフル活用して昴にいらんことを無理矢理教えたのだろう。

「昴、へ」

「せやアリス！ つぶやんに必殺技を試しに喰らわしたり！」

鬱陶しいことになる前に部屋に帰ろうと思ったら、めっちゃええこと思いついた！ みたいな顔のジョージに遮られた。

「ウチの言う通りにやりや、きつと堅物つぶやんもデレるって」

妙に自身満々に断言する。なんだよデレるって。

「う……。け、けど」

恥ずかしそうにもじもじとする昴。やはり昴にとって良くないことか。まったくこのくされオタツキーは……。

「昴。無視しろ。アレはリアルに二次元を求める重度の障害者だ。黄色い救急車の必要な奴だ」

成分の半分が哀れみで出来た台詞を昴に言っ、ソファから立ち上がるうとするが、

「怖氣ついたんか、つぶやん」

ニヤリ、と口角を上げ不敵に挑発してくるジョージ。

「まさかとは思っけども、つぶやんともあろう者が敵前逃亡はせんですよあ？」

今こいつは自分は敵だと認めなかったか？

俺は目を細める。

昴はそんな俺とジョージに挟まれおろおろと落ち着きを無くしている。俺とジョージの間に不穏な空気でも感じたのだろう。心配性な奴。

ふ、と俺は笑むように口から息を吐くが、多分表情はいつも通りのままだろう。こういう時、ニヒルに笑えると様になるのだが、まあ、仕方がない。無表情と言うのも知的な感じや余裕な感じがして良いだろう。

「さて、戻るか昴」

すたすたと談話室を出――

「ちょ！ ちょつと待ってえなつぶやん！ おかしいやろ！ 今のでそないな反応はおかしいやろ！ なんでやねんて！ ここは乗るところやろ！？」

なぜか知らんがやたら悲痛な感じだ。

「ほら昴。ここは魔窟だ。害されないうちに戻るよ」

俺は表情として出ない顔の代わりに内心でとびっきりのスマイルを浮かべながら、淑女をエスコートする英国紳士風の優しい声音で言い、馬鹿を放置するこちに決定した。

「ちょ、わ、わあった！ 頼む！ この通りや！ お願いしますから一発喰らってください！」

ついには土下座までしやがった。こいつにはプライドとかはないのか？ ……ないか。ないから自分がオタクだとカミングアウトできるのだろうし……あれ？ オタクであることに誇りがあるからカミングアウトできるのか？ どっちだ？

額に手を当て、盛大な溜め息をつく。何でこんな奴と友人関係を築いたんだ、俺は。

「なんか土下座までしてきたのだが、昴。嫌なら嫌と言え」

必殺技をするのは俺ではなく昴なので、一応そう言っておく。

まあ、昴のことだ。ここまでされたら

「はあ。湊、付き合っただけだよ」

言うと思いました。お前は、人の頼みを無下に断れないものな。

俺はやれやれと内心で盛大に呆れ、溜め息をつきながらソファに座りなおす。

「さすがマイフレンド！ さあやるんやアリス！ 必殺技GO！
土下座体制から勢いよく姿勢を直し、うつきうきと指示を出すジ
ョージ。」

昴はやっぱり抵抗があるのか、最初もじもじしていたが、結局意を決めたようだ。

ちなみに、風呂上りの昴は薄い水色に白い水玉模様の入ったパジャマ姿だ。サイズが少し大きいらしく、ズボンの裾は折ってるし、袖からは微妙に手が出てない。

「うとう……。湊。ちよつとむこう向いてて」

さっさと終わらせたいので俺は言われた通り、昴に背を向ける。

「ジョージくんも」

「ええ？ ウチもかいな。しゃーないなあ」

渋々、といったような感じが感じられる。

暫くごそごそとした様子や、思案するような間。

何でもいいから早く終われ。とかボケツと考える。そっぴや風呂にまだ入ってねえし。はあ、消灯時間なんて誰も守ってないが、それでも消灯時間になるとガス切られるからな。まだ時間に余裕はあるから心配は無いが……。

とかつらつら考えていると、くいくい、と服を引っ張られたので昴の方を向く。

——っ。

「ねえおにちゃん……。ボク、もうねむいよう」

ボタンを二つ開けているパジャマは肩までずれていて、女の子すわりでぺたんとソファに座っていて、サイズの大きい袖から出てな

い手の指で、眠そうに目をこしこしと擦って、つたない舌足らずな調子の声で、昴はそう言ったのだった。

俺は今日ほど感情を表すことの出来ない自分の顔に感謝したことは無い。

それほどまでに、強烈だった。確かに必殺だ。

誰がコレを男だと思えるだろう。

俺を思わず呼吸を止めてしまった。と言うよりも体の全機能が不全を起こした錯覚すら受けた。

頭に入ってきた情報と、それに対し素直な感想を持つ心。それを抱いた自らに嫌悪感と罪悪感を持つ俺。

昴はやるだけやるとやっぱり恥ずかしく、顔を耳まで真っ赤に燃やして、俯きながらいそいそとパジャマを正している。

「くっはーっ！ よもや、よもやコレほどまでの破壊力だとは！ やっぱアリスは最高やな！ かつてここまでかわいい奴はいただろうか！？ いや、いなかった！ 二次元にもここまではいなかった！」

ジョージは立ち上がり拳を握り締めて大絶賛しだした。

バカの声がやたら響くと思つて首を廻らすと、談話室にいた全員が顔をあらぬほうに背けていた。

……嗚呼、こいつらもバカか。

自分の事は遙か棚の最上に押しあげてそんなことを思った。

「だと言つのに！ つぶやん！ こないエライもん喰ろても表情一つ変えんてのはどういう了見じゃ！ 見てみ！ 他の奴らでさえこのあり様なんやで！？」

幾つか咳払いが聞こえ、テレビの音量が不自然に高くなる。

野郎ばかりの空間だと、男だと理解していても昴みたいなのを女と誤認してしまうもんなのだろうか。はあ、まさかホモとかゲイとかがこの中に混在して無いだろうな。

——心配だ。

「どうでもいいが、お前はいつから二次元の美少女からリアルな男

に乗り換えたんだ？」

話題を変える。

実際問題として、俺も相当ヤバかった。心臓が早鐘のように鳴ってやがる。

クソツたれ。昴は男で、大切な友人だと言うのに。

昴は、きつとこんなおふざけは嫌いなはずだ。

最悪だ。自分で自分に吐き気がする。まともに昴と顔を合わせられない。

「ウチがいつ乗り換えたなんて言うたよ。リアルに二次元を被せて、その結果の素晴らしさに感動しとるだけや」

どこかムツとしたようにジョージは言うが、それはそれでどうかと思う。

「そうかい。――昴。俺は部屋に戻るから」

俺は誤魔化すように溜め息と共にそう言って、談話室を出た。付き合いきれない。これ以上は。

「あ、待って湊。ボクも戻る」

後ろから昴の声が聞こえたが、俺は聞こえていないふりをして早足に廊下を歩く。

不整脈ってこんな感じなのか。

不自然なビートを刻む胸にそっと手を当てて、そんなことを思った。

八話

俺たちの部屋は三階の一番奥だ。

寮は五階建てで、一階は玄関と集合ポストと寮監室があり、二階は先ほどまで居た談話室と食堂がある。三階からは各学年ごとに住民——生徒の部屋となる。つまり、三階は一年。四階は二年。五階は三年。と言う風に。

それぞれの部屋の間取りは全て同じで、普通のアパートやマンションのように端の部屋だけ他と違うと言うことは無い。これは、ジョージ等の友人の部屋に用があって入室した際に知った。まあ、窓が一箇所多いというのだけが違うか。

部屋の扉は飾り気も暖かみも何も無いつまらない鉄製。冬なんかは冷え切ってノブを触るのが辛くなりそうだと、現在対策を考案中。お湯でもかけるか、と言うのが一番普遍的で簡単だが、今は夏なので冬になるまで結論は先延ばし。

「ねえ、湊」

「ん、なんだ？」

気を紛らわすようにつらつらとどうでも良い思考をしていたのだが、昴の少し小さな声にそれを中断する。

ここはまだ廊下だ。俺は結局、後ろで待つてと言う昴を無視し仕切れずに、昴と並んで部屋まで戻っている。本当に、俺は昴に対して甘い。

「……怒ってる？」

恐る恐る、という感じで昴はそう問うてくる。

「……………はい？」

横を見ると、昴はこちらに顔を向けず、俯きぎみに歩いている。長い髪に隠れて表情が窺えない。

何故、俺が怒っているなどと思ったんだろうか。

まあ、確かに。あのイカレオタツキーには少なからず怒りを抱い

てはいるが、それとはどうも違うらしい。それに、これはほとんど八つ当たりみたいな怒りだ。向けるべきは自分。

昴は黙っている。俺がちゃんと答えるのを待っているらしい。

「怒ってなんかいないけど……なんで？」

「湊、さっきから少しピリピリしてる」

「まさか」

俺は思わず笑ってしまった。と言っても顔が動いた気配は無いが、唇が持ち上がりくらいはしただろう。俺の感情はいたって平穏だ。表に出すほどの怒りでもない。

「ううん。してる。ボクには、わかるよ。湊とずっと一緒にいるんだもの。それくらい、わかるよ」

「……………」

「ボクが、あんなことしてから。湊、様子が変だモノ」

「あんなこと？」

「ジョージくん曰く、必殺技」

「あ……………」

「ごめんね」

ぼつり、と昴は震える声でそう呟いた。

「なんで？」

「だって、ボクがあんな気持ち悪いことしたから……………だから、湊は怒ってるんでしょう？ 機嫌が悪いんでしょう？ だから、ごめんちゃんと、嫌だって言えばよかった……………」

「……………」

俺はとっさに否定の言葉を吐こうとし、やめた。昴には、そんな脊髄反射のような言葉は逆効果だ。それは、ほんの三年余りだが、けれどそれだけの時間で十分に理解していた。

だから、考える。

昴の言うこととは違う。そこは間違いない。それを伝え、尚且つこいつが傷付かず、反論できなくする……………納得と理解のできる台詞。それを考えながら、俺は自分を責めていた。

まただ。と。

昴は、人の負の感情に敏感だ。いつそ、過剰と言えるほどに昴は負の感情に対して敏感でそれを怖がっている。

今まで、他者が抱く負の感情は全て昴に向いていた。だから、昴は誰かが負の感情を抱くと、自分のせいだと思い込むようになってしまった。昴にとって、それは消えない傷となつて今も残っている。見ず知らずの他人にまでそれが当てはまるわけではないが、自分の周りであるなら全ては自分の所為なんだと、昴はそう思い込んでいる。ましてや、いつも傍にいる俺が、怒りなんて感じていれば余計にそれを感じ取ってしまい、自分が悪いと考えてしまうだろう。たとえ身に覚えがなくとも、些細な出来事や理不尽だとかいえないような事柄、関係の無いことまで、自分に当てはめてしまう。

だから、俺はそうならないように気をつけてきたというのに……。悔いたところで、どうしようもない。今は昴の誤解を解き、これからは二度とそうならないように気をつける。

それが重要だ。

あと、少しで部屋の扉の前だ。

「昴。それは違うよ」

ここで、昴のことをかわいいとか思ってしまった自分に怒りを感じてた、と素直に言っても昴はやはり自分の所為だと思っただろう。男らしくない自分の所為だと。

かといって、アホなことを昴にさせたジョージにムカついていた、とおちやらけて言ってみても、昴はそれも自分の所為だと思っただろう。嫌だと言わなかった自分の所為だと。

昴が俺を見上げる。昴は身長が160ないし、俺は170とちょっとだから、自然と昴は俺を見上げるようになる。

透き通るように綺麗な、僅かに茶色がかつた瞳に俺が映っている。

「昴は気持ち悪くないし、あんなことしたくらいで怒ったりするほど、俺は小さくない。それは、昴の方がよく知ってると思うんだけどな」

昴の瞳が僅かに揺れた。昴は今の台詞のどれも否定できない。自分のことを気持ち悪いなど言ったら俺が傷付くことを経験として知っているから。俺が小さくないということを否定すれば、それは俺が小さいと愚弄したことになる。

昴は、それに耐えられない。

……卑怯だな。

けれど、俺にできるのは精々この程度だ。

何を言ったところで怒りを抱いていた事実は消えない。下手なことを言えば昴は自分を責める。ウソなんかついたところで、昴はそれに気付くし、それに対して傷付くだろう。

だったら、昴に否定できない言葉でただ違うと否定して、そのまま無かったことにする。

俺には、それくらいしか出来ない。

——卑怯で、臆病。そして馬鹿者か。救えないな、俺。

「だから、ほら。んな不安げな顔するなよ」

俺は声だけは陽気に昴の頭を撫で回す。

さすがに、もう乾いた昴の髪はさらさらと流れるようで手触りがいい。

「うん。ごめんね」

「だから、謝んなって。んな顔していると、なんだか俺がお前に意地悪してるみたいだろ。笑え笑え」

くしゃくしゃと撫で回しながら、昴の頭を揉む。

「わわ。ちょ、ちよつと湊！ やめてよ！ くすぐりたいし何だか気持ち悪いよ！」

そう言いながら昴は頭をふって俺の手を払う。

そうして俺から距離を取ると、頭を抱えるようにして涙目になりながら、まるで警戒する小動物のように睨み付け来た。そこには、先ほどのまでの様子は無い。

「ほらほら。さっさと部屋の鍵開けてくれ。俺は風呂を所望してる」
鍵は各部屋に一つ。俺は昴が風呂に入っている間に出ていたから、

当然鍵を持っているのは昴だ。

昴は溜め息をはいて苦笑すると、パジャマのポケットから鍵を出した。

なんとかなったことに、俺は気づかれないよう安堵した。

九話

部屋に戻ると、俺はすぐに風呂に入った。

浴室は小さいが、浴槽があってシャワーがある。とりあえず浴槽の中でシャワーを使わないといけないようなホテル仕様ではない。

考えてみれば、これって結構すごいことじゃないか。普通、寮の風呂って共同だろう。俺はそう考えていたので、これは結構驚きだ。無論、嬉しいのだが。

浴室の床は繊維強化プラスチックで浴槽はステンレス製のユニットバスだ。何気に金かけてるなこの寮。

トイレと浴室は別になっているので助かってはいるが、その分浴室は本当に狭い。更に言うなら、浴槽も狭い。微妙に体育座りみたになる。

「はあ……」

身体も頭もさっさと洗い終えた俺は、浴槽にに張られたお湯に浸かるなり大きく息をついた。いいねえ、風呂に入った時のこの脱力感。リラッックス。本当はもうちょい広いと言うこと無いんだが、贅沢は言えない。共同風呂じゃないだけでも感謝し倒さないといけない。

あの後、昂は気を直したみたいで風呂に入ろうとしていた俺は、「お風呂の中で寝ないでよ」などと手のかかる子供に言い聞かせるお母さんみたいなことを言われた。

知らず、笑みが零れる。きっと顔には出てないだろうから、心の中だけで。

昂といえるのは楽しい。心が休まる。俺とは違って表情や感情の良く動く昂は、見ていて気持ちがいい。たまに、子供っぽく見えるときもあるけど、そこもまたあいつの魅力だと思う。

「——はあ——」

俺は再び息を吐いてみた。

今度は、さっきの脱力の極みのような気抜けの息ではない。

こうして、誰もいないところで、誰も見ていない所で、ふと昴のことを考えると胸が痛くなる。心的腹痛の類ではない。不整脈や狭心症、心臓発作なんかでもないのだが、普通に考えると、そっちの方が幾らかマシだと思う。

俺は、いつからか、気付いたらおかしかった。狂ったのかもしれない。頭がいかれたのかもしれない。

昴は大切な友達だ。それ以上でも以下でもない。

なのに、昴の一挙手一投足に一喜一憂し、笑顔を向けられることに悦び、はにかんだり、照れたりしているのを見て愛しく思ったりしている俺がいる。

ふと考え思うのは、いつも昴のことだ。

こうしている今も、昴のことを考え思っている。

浴槽に張られた、少し温めのお湯。その色は入浴剤の白で、そこには自分の顔が僅かに映りこするものの、沈んだ自分の身体は見えない。

浴槽の乳製品のような湯に映っている自分の顔は、常の通りの無表情。抓ってみても、引っ張ってみても、それは変わらない。たとえ、その無表情がアホの子みたいに可笑しくとも、それに、苦笑を零そうとも、顔には表れない。

まるで、人形の顔のようだ。

そして、その自分の顔は——感情を表すことの無い自分の顔は、容易に昴の顔を想起させる。

それは今の昴ではない。最初に出会ったときの、そして一年前までの昴の顔。

全てを拒絶せず、受け入れず、ただ其処にただだけの昴。

まるで、能面のような顔をしていた、一人の少年。

今でも、思い出すと胸に切り裂かれるような痛みが走る。

まだ13歳でしかない少年が、自分と変わらない少年がそうあるには余りにも惨い様。

バシャリ、と湯を叩く。

乳白色の水面が僅かに波打ち、揺れる。

揺れる水面は浴室の光を歪め漂わせながら反射して、それを見つめる俺の顔は映らない。

だから、思い、描く。

たとえば、弁当を美味いと言ったときに見せる、照れながらも嬉しそうな笑み。

たとえば、からかったときに見せる、警戒と批難を含めた顔。

たとえば、――。

なにも、過ぎた遠い日を描くことは無い。

今の昴は実に様々な表情を見せてくれる。笑い、怒り、悲しみ、楽しむことが出来ている。

過去は過去。

けれど、だからこそ、過去を現在にしていけない。

俺は、昴のことが好きだ。愛しくも思う。けれど、それは友人としてだ。それ以上の思いなど、あろう筈が無い。抱いてはいけない。実際問題、俺が昴に友人としての度を越えた思いを抱いているとしても、それを表に出してはいけない。奥へ奥へと隠さなければいけない。そして、殺さなくてはいけない。

でないと、気付いてしまった時、昴はとても傷付いてしまうだろうから。裏切られたと、思うだろうから。

そんな思いを俺は昴にしてほしくない。

昴の優先順位は、俺よりも高い。たとえ自分を殺すことになっても、昴のことを優先する。

俺は浸かっていた湯から身体を上げると、浴槽から出た。

浴槽の栓を外す。その際、伸ばしかけた左手を引っ込めて右手で行い、乳白色の湯を抜く。

換気窓を開けて浴室を出た。

ぞんざいに身体を拭いた俺は、トランクスー丁で寝室兼居間兼個

室兼用の、つまりはワンルームに戻った。

部屋にはベッドとクローゼットと木製の勉強机、それと対になる椅子がある。

ベッドは二段ベッドで、扉から入って見たところの右手壁際に置かれている。クローゼットはベッドの後ろだ。

勉強机は左手壁際に間隔を開けて並べてある。

ベッドにしる机にしる、移動は可能なのだが面倒なので前使用者がそうしていたのだろう配置のままだ。

これでは個人のスペースの無い完全な共同部屋だが、俺は全くそんなことは気にしない。

個人のスペースがほしい者は、例えばベッドを真中に置いて、左右で区切ったりしているが、流石にこの部屋の現状配置からそれに移行するのは、どう考えても大仕事だ。だから、実際は気にしない気にする以前に、面倒臭すぎる。

それに、昂は実家では一人ぼっちだったから、誰かと一緒というのは新鮮で楽しそうだと嬉しそうに言っていた。そこにある事实は暗いものだが、昂自身は誰かと一緒という現状を気にいつているみたいなので、俺は何も言わない。

昂が現状を気にいつている。ならば、それだけで十分だ。

部屋の窓は真正面と左側、つまりベッドの横にある。冬は寝る時に外気で寒くなりそうだが、暖房器具を上手く活用すれば苦にはならないだろうと踏んでいる。

濡れた頭にバスタオルを乗つけたまま、下着一枚で椅子に座る。

俺の机は奥、窓側で、その横に昂の机がある。

そして、その机に顔を横向きに乗せて、昂が寝ていた。

顔が丁度こちらを向いていて、無防備すぎる寝顔が見える。てか、どうしても目がそっちに行く。

その顔の下にはノートと教科書が広げられていた。どうやら、予習か復習をしていたらしい。視線を下、昂の足元に落とすと、オレンジ色の細いシャーペンが落ちていた。

俺はわしゃわしゃと適当に髪を拭くとバスタオルを椅子の背もたれに投げ置き、シャーペンを拾って昴のペンケースに入れる。

「おい、昴。机なんかで寝るな。夏とは言え、風邪を引くぞ」
「ううー」

やれやれと肩を揺らしてみろが、そんな意味のなさないうめき声をあげるだけで起きる気配が無い。

まあ、予測してた通りだ。

昴はほぼ決まった時間になると寝てしまふ。まるで小学生のような奴だが、これにも家の事情が関ってくるため、とやかく言えない。

……近頃は小学生でも決まった時間には寝ないか。

なんにしろ、起こすのもかわいそうだ。俺はそう思い、一瞬ためらってから、そつと昴を抱きかかえる。頭は右手側に、膝の下に左手を入れる。僅かに左手側が落ちかけるため、上手くバランスを取る。

俗に言う所のお姫様抱っこ。零れる長い髪がさらさらとくすぐつたい。

……誰も見て無くてよかった。

昴が机に寝てしまったびに行っていることとは言え、さすがに恥ずかしい。誰かに見られようものなら、俺はそいつを口封じのために軽くキルっとかないといけないだろう。

昴はまるで男とは思えないほど軽い。そして、細くて華奢だ。下手をすると、壊れてしまいそうな気がする。

ふわり、と。昴の髪から甘い香りがした。それはすぐ近くにある俺の鼻腔をくすぐる。

シャンプー……いや、リンスだろうか。

俺はその香り多少どぎまぎとしながら、昴をベッドに運ぶ。

昴は二段ベッドの上だ。何か知らんが、どうしてもここがいいと必死に主張するので、そうなった。

備え付けの梯子を慎重に登る。たとえばんの数段といえども、この状態で落ちたら痛い。それよりも、昴が起きてしまふ。

こういう時、二段ベッドと言うのは不便だ。いつも抱く感想だが、今さら文句など言わない。

昴をそつと布団に横たえる。むにゃむにゃ言いながら寝返りを打つ昴に、思わず笑みを抱く。

夏とは言え、何もかけずに寝ると風邪を引く恐れがある。そつとタオルケットをかけてやり、俺はベッドから降りる。

椅子を開いた窓の前にまで移動させ、座る。

風呂上りだからだろうか。やけに顔が熱い。

冷まさないことには寝れそうに無かった。

十話

「――と」

「……………」

「――湊、朝だよ。いい加減起きてよ！」

ゆっさゆっさと揺らされる。

……眠い。俺の睡眠を妨げるな。

寝たりない頭で、機嫌悪くそう思う。

昨夜は結局、妙に頭が冴えてしまつて寝たのは日にちが変わつてからだ。だから、すごく眠い。

寝返りを打ちつつ壁際に移動。

「湊。学校、おくれちゃうよ」

むう、もうそんな時間なのか？ けどまあ、いいや。今日はサボろう。寝て曜日だ。ちょうど、気持ちのいい声も聞こえることだし……。

ぼけぼけした頭は怠惰を絶賛提唱してくる。俺はそれに従うより他には無いのだった。

完。

「起きないと、お弁当無しにするよ！」

「それは困る」

「あ、起きた」

完結してる場合じゃあない。俺にとって昴の作る弁当を食べるのが、学校へ行く楽しみの一つなのに。それが無くなったら、俺は……俺はどうすれバイナダー！

「……あのさ、湊。なにを悶えてるのか知らないけど。着替えよう。あと、おはよう」

頭を抱えてクネっていた俺は、そこでようやく正気を取り戻した。頭がようやく正常稼動に移行したようだ。

睡眠中と寝起きは頭が鈍りに鈍って困る。鈍った頭は怖い。つい衝動的に変態めいた思考に支配されて奇怪な行動をとりたくなってしまう。恐ろしいことだ。

ともかく

「おはよう、昴。弁当無しは勘弁してくれ」

言いながら、俺は欠伸と伸びを一つ。そして身体をラジオ体操みたいに捻る。捻る。捻って捻って捻る。背骨がぼきぼき鳴って小気味いい。

「うん。ボクも、お弁当食べて欲しいもん」

にこり、と笑みながらそんなことを言う。

……うれしいことを言ってくれる。

気恥ずかしいので、捻り体操を終えた俺はベッドから降りて、話を変える。

「ところで、今何時？」

何気なく訊いてみた。

夏の朝の涼しさは、これ以上ないって位に気持ちがいい。たまに蒸し蒸ししてキレそうになるが。

俺はトランクスとＴシャツだけで寝ていたし、燃費が良いのか悪いのか汗なども余りかかないので、朝起きて身体が気持ち悪いということは少ない。

俺は寝巻きとして着ていたＴシャツをさっさと脱いでシャツと夏用のカッター、ズボンをハンガーから取って着ていく。

「え、えつとね。今は、八時」

何気ない風を装いながら窓の外に顔を背けつつ、やや上擦った声で昴が時間を告げる。

なるほど。八時か。どうやら、朝食を摂っている時間はないらしい。

内心で朝食が抜きになったことにガツクリと肩を落としつつ、洗面に向かう。朝の栄養補給は大事なんだがなあ……。

洗面所はトイレと一緒になっている。

常々思っのだが、風呂独立、便所と洗面所共同というこの配置はおかしく無いだろうか？ いや、まあワンルームの寮の部屋に風呂と洗面所とトイレがついてるだけで御の字なのだが。これ以上望むのは罰当たりなのかもしれないが。それでも、異を唱えずにはいられない。……実際には唱えず思っただけだが。

コックを捻って水を出す。夏の水道水はどうにも中途半端な冷たさで気持ちが悪い。てか、生温いぞ。うあ、朝からすっげえ不快。胸中でウンザリとしながらも時間が差し迫っているので手早く顔を洗い、寝癖を適当に直す。

「さて、と。学校に行きますかね」

準備を済ませた俺は、いつも通りに女子制服に身を包んでいる昴にそう声をかける。最初の頃こそ本当に女子と同じ部屋に居るような錯覚に度々陥ってしまい、精神バランスが子供の遊ぶシーソーみたいにエライ勢いでギツコンバツコンしていたが、今は慣れてしまった。

慣れたことで今は精神バランスがおかしくなることも無いのだが、なんか、慣れたら慣れたでそれはどうなのだろうかと首を捻らずにはいられない。慣れってこええ。

「あ、待って湊」

言って、昴は机の上に置いていた物を差し出す。

えへへー、とはにかむように笑う昴に、俺は不覚にも、うっ、などと唸ってしまった。

幸いなことに昴は俺の失態に気付いていない。

「おにぎり、作っておいたんだ。どうせ朝ご飯食べられないだろうと思って」

言う通り、昴の差し出した手の上には、ラップに包まれた丸っこい三角形のおにぎりが二つ。海苔もちゃんと巻いてある。

「まったく。湊っては何度起こしても起きないんだもん。夜更かしはしない方がいいよ」

やや呆れたふうにそう言ってくるが、その顔は笑っていた。

俺は思わず、お前のせいなんだけど、と言いたくなかったが、冷静に考えると俺は男の寝姿他諸々に悶々していたため寝れなかったということになり、それはこれ以上ないくらいに変態的で、何よりそれは昴に対する裏切りと同義だ。

俺は昴にばれないよう、内で自らを罵倒する。——この、馬鹿者が、と。

何にしろ、こういう細かな気遣いが本当にありがたいと思う。本当に。

「サンキュな。んじゃ食いながら登校しよう。流石に食ってたら間に合わねえし」

俺は礼を述べつつそのおにぎりをもらう。結構ぎりぎりに作ってくれたのだろう、おにぎりはまだ温かく、握ってからそれほど時間が経っていないことがわかる。

こういう時、笑顔の一つでも返せばいいのだが、いかんせん俺の顔面の表情筋は絶賛職務放棄中だ。ピクリ、と僅かには動くが、喜怒哀楽を表すには至らない。

こんな俺は本当に煩わしく、また昴に対して申し訳なく思う。

……無表情で述べられる礼に、どれほどの温かさがあるというのか。だから、俺は声だけは明るく陽気に振舞う。なにも表情だけが感情を他者に伝えるわけではない。表情で伝えることが出来ないのなら、それ以外の、たとえば声や身振りで現し伝えればいい。それは多少難儀ではあるが、苦ではなく、手段が他に生きているという事実が喜ばしいことだ。

——そのことに気付いけたのは、つい最近だが。

「うん。あ、飲み物は途中の自販機で買ってね」

「……缶で味噌汁ってねえのかな」

「ないよ」

そんなことを言いながら、いつも通り、けれど今日は少しだけ遅く二人一緒に寮を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3823b/>

諸事情により

2010年10月9日22時07分発行